

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE
日本スポーツプレス協会会報

AJPS

NEWS



AJPS 23

DECEMBER.1
2005

FIFA WORLD CUP MEMORIES Vol.2
2005 New face of AJPS

**表紙
は語る**

AJPS NEWS 23 DECEMBER 1 2005

高橋 学
Manabu TAKAHASHI

■撮影者プロフィール
1975年福島県福島市生まれ。1994年専門学校東京ビジュアルアーツ入学、写真学科でスポーツフォトを専攻。卒業後、ジャパンスポーツ代表の菅原正治に師事し、フォトグラファーの仕事に就く。最近はサッカーやフットサルを中心にスポーツ全般を撮影している。

C O N T E N T S

- 3 2005'07年度AJPS役員／理事一覧
- 4 FIFA WORLD CUP MEMORIES Vol.2
- '82 ESPAÑA 4
- '86 MEXICO 5
- '90 ITALY 6
- '94 USA 7
- '98 FRANCE 8
- '02 KOREA/JAPAN 9
- 10 ワールドカップドイツ2006まで1年
- 12 2006アジア競技大会を1年後に迎えるカタログドーハを取材して
- 14 2005 AJPS新入会員報道写真集 地球にスポーツII
- 30 第4回東アジア競技大会取材報告

foreword

「2006年ワールドカップの注目はゴール判定システム？」

大住良之
Yoshiyuki OSUMI

「レフェリーの目」を、判定の唯一のよりどころとしてきた国際サッカー連盟(FIFA)が、ついに「ハイテク」の導入に踏み切った。電子技術を駆使したゴール判定システムだ。9月にペルーで行われたU-17世界選手権で第1回のテストを行い、12月には日本で開催される「クラブワールドチャンピオンシップ」で再度チェックして、結果が良ければ来年夏のワールドカップ・ドイツ大会で使用する。これで判定ミスがなくなるのか……。だが最近、その必要性が疑問視されはじめている。

アディダス社が開発した発信機付きのボール、4つのコーナーに取り付ける発信機、それを受信する4つのアンテナ、そこからのデータを受け、分析する2台のコンピュータ、2人のオペレーター、ゴールインの判定と同時にレフェリーに知らせる方法(特別な腕時計を使うらしい)……。システム開発費を別にしても、1試合のオペレーションに何百万円もかかるという。ところが、ゴールがはいったかどうか疑問のケースなど毎試合あるものではない。1大会に1回あるかないかの判定のために、巨額の費用をかける必要があるのかという疑問だ。

「このシステムがどんな情報をレフェリーに伝えて、最終的にはレフェリーが判断する」と、FIFAは説明している。

「それならば、レフェリーに任せておけばいいじゃないか」と、多くの審判関係者は語る。いずれにせよ、これだけ費用が高くては、ワールドカップ後は無用の長物になってしまう恐れは十分だ。



日本スポーツプレス協会(AJPS) 第6期(2005'07年度)役員／理事一覧

2004年に行われた会員の選挙により、第6期AJPS役員が決定、2005年5月19日におこなわれた2005年度総会で承認されました。任期は2005年5月19日より2008年の総会の日までとなります。

今回は、選挙管理委員会の提案により理事を一人多く選出いたしました。これは会員数も139人を越え、理事一人あたりの仕事量も飛躍的に増加しているという判断によるものです。理事会審議のあと総会でも承認されました。

ベテランの役員が多い中、新人の理事が二人誕生いたしました。岸本勉、築田純の両氏です。すでにスポーツジャーナリストの世界で活躍しているお二人ですので、十分な活躍が期待できます。

当協会も創立30年を迎え、2006年度には記念事業も予定しております。ますますのご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



会長
水谷章人
President: MIZUTANI, Akito



理事(総務担当)
藤田孝夫
Director: FUJITA, Takao



理事(IT担当)
岸本 勉
Director: KISHIMOTO, Tsutomu



理事(財務担当)
赤木真二
Director: AKAGI, Shinji



理事(国内担当)
築田 純
Director: TSUKUDA, Jun



監事
今井恭司
Supervisor: IMAI, Kyoji



監事
北川外志廣
Supervisor: KITAGAWA, Toshitoyo



副会長
小林 洋
Vice-President: KOBAYASHI, Yosuke



理事(国際担当)
山崎浩子
Director: YAMAZAKI, Hiroko



顧問
川津英夫
Adviser: KAWAZU, Hideo

AJPSのホームページがリニューアルされました。新しいタイプのスポーツ情報源としてご活用ください。

<http://www.ajps.jp>

World Cup Memories Vol.2

かつて「AJPS NEWS 13」と「AJPS NEWS 14」の2回にわたり「World Cup Memories」として1970年のメキシコ大会、1974年の西ドイツ大会、そして1978年のアルゼンチン大会を実際に現地で取材されたジャーナリストの先達たちのリポートと写真を掲載したことがありました。

好評であった、その連載。なぜか続けられることなく頓挫してしまいましたが、ドイツワールドカップを半年後に控え、続きの1982年スペイン大会から前回の韓日大会まで、ずっと振り返り、終わらせてしまうというのが本企画です。

Jリーグができるから、この国のサッカー事情は、がらっと変わってしまいました。ワールドカップの取材はフリーランスとサッカー専門誌によって開拓されたのに、現在では新聞社、雑誌社が主導権を握りつつあります。その歴史的事実とわたしのワールドカップとのかかわり合いもあわせて書きたいと思います。

文・白鷗隆幸
Text by Takayuki SHIRAHIGE
写真・北川外志廣
Photo by Toshihiro KITAGAWA



6ゴールをあげスペイン大会の得点王になったロッシ

ESPAÑA'82 '82スペイン大会

わたしが最初に仕事としてワールドカップに携わったのが1982年のスペイン大会でした。当時、編集者として勤めていた講談社からワールドカップ写真集を出すことになり、当時のSPIRIT PHOTOSのメンバー（富越正秀、北川外志廣、清水和良、大河原弘）が現地で撮影した写真を提供していただき、わたしは日本国内でテレビ観戦、記事を書くという仕事をしました。

NHKがほとんどの試合を放送してくれました。生中継で全試合を見ましたし、ともに写真の受け・整理を担当した小林洋氏がへそくりをはたいてビデオデッキ（SONYのβです。30万円以上したと記憶しています）を購入、テープがすり切れるほど見て記事を書いたことを憶っています。

大会を制したのは、「黄金のカルテット」（ジーコ、ソクラテス、ファルカン、トニーニョ・セレーノ）を擁したブラジルでもなく、マラドーナ率いるアルゼンチンでもなく、「パンビーノ・デ・オロ」と呼ばれたパオロ・ロッシが大活躍したイタリアでした。

そのロッシがゴールを決めて喜んでいる写真が表紙に選ばれました。写真集は「華麗なる激突 サッカー世界一」として出版され、重版になるほど売れたと記憶しています。

今はなきバルセロナ・サリアスタジアム（マンションが建っているらしい）のイタリアvs.ブラジル戦、延長・PK方式で決着した西ドイツvs.フランス戦などは23年経った今でも鮮明に憶えています。

わたしが、ワールドカップの凄さを知った最初の大会がエスパニョーラ'82でした。



赤木カメラマンは、アステカスタジアムの全景を撮るために階段を登っていたため、マラドーナの5人抜きを見逃したとか

MEXICO'86 '86年メキシコ大会

奥方が旅行社に勤めていたAJPS会員でフォトグラファーの赤木真二さんが、「白鷗さん、ワールドカップのツアーが定期割れしていく割引でメキシコに行けるんですが、行ませんか?」と説いてくれました。今から思えば夢のような話です。それがワールドカップを現地で観る最初になりました。

わたしは、どちらかというと1968年のメキシコ・オリンピックのスタジアムを訪問することが大きな目的であったような気がします。

決勝ラウンドから10試合ほどを観戦しました。ホテルはカテドラル近く、オシャレなマレノ通りのホテル・リッツ。そこのペントハウスに2週間ほど滞在しました。

もともと86年の大会はコロンビアで開催される予定でしたが、経済的な問題で返上、70年に開催しておりサッカーワールドが整っているメキシコで再度開催されることになりました。ところが前年秋に大地震に襲われ、開催が危ぶまれたのですが、なんとか開幕にこぎつけたのです。

この頃まではADカードの発行もルーズで、日本のサッカー専門誌をプレスセンターまで持っていく、「これが俺の記事だ」と言ってADカードを手にした猛者もいたとか。すべてにおいて「融通の効く」大会でした。

この大会は、マラドーナの大会でした。が、もっと印象に残っているのはグアダラハラで行われた準々決勝フランスvs.ブラジル戦でした。延長・PK方式の末、ブラジルが敗れ、サポーターが泣き崩れるのを観たときは本当にびっくりしたものでした。決勝まで好試合の連続で、試合内容だけでいえば最高に面白い大会でした。

文・白鷗隆幸
Text by Takayuki SHIRAHIGE
写真・赤木真二
Photo by Shinji AKAGI



準決勝で地元イタリアがアルゼンチンに敗れ、大会が終わってしまったかのようだった

ITALIA'90 '90イタリア大会

わたしがはじめてジャーナリストとして取材申請した大会でした。が、抽選で及ばずウエディング(補欠)リスト1番でADカードは手にできませんでした。しかし、日本文化出版から『PRIMEIRO』という写真集が出版され、その執筆を担当するということで、写真を担当されたフォート・キシモト(当時、藤田孝夫さんが所属していました)に居候の形で全日程をカバーしました。そのために、わたしは完全なフリーランスにならざるをえず、開幕戦とイタリアの初戦は新婚旅行で愚妻と観るはめに。人生のエポックになった大会でしたが、愚妻が生まれて初めて生で観たサッカーがアルゼンチンvs.カムラーン戦だったわけで、これも信じられない話です。

北はトリノから南はサルディニヤ島、

シチリア島まで、ほぼイタリア全土を取材しました。鉄道連絡船乗り放題のユーレイルバスを、これでもかと使いました。

本命・イタリアが、ブラジルを破ったアルゼンチンにナボリのサンパオロスタジアムで延長・PK方式の末敗れた瞬間に、大会自体が終わってしまったかのような感じでした。

決勝は、累積警告や負傷者続出のアルゼンチンに戦う余力がなく、西ドイツ、アントレアス・プレーメのPKとアルゼンチンに出された2枚のレッドカードで決まってしまいました。1-0、史上最悪の決勝といわれた試合です。

イタリア旅行(?)という意味では最高の日々でしたが、ワールドカップという意味では欲求不満の残る大会でした。

文・白髭隆幸
text by Takuayuki SHIRAHIGE
写真・清水和良
Photo by Kazuyoshi SHIMIZU



牧野フォトグラファーの手元にはワールドカップの写真は1枚も残っていないそうです

USA'94 '94アメリカ大会

文・牧野龍太郎
Text by Ryutaro MAKINO
写真・清水和良
Photo by Kazuyoshi SHIMIZU

'94ワールドカップ USA大会取材記。 ノックしないドアは、開かない。

1994年ワールドカップサッカーアメリカ大会が行われたとき、私はニュージャージー州に住んでいました(マンハッタンとハドソン川を挟んだ西側がニュージャージーです)。

アメリカ大会の予選は、フランス代表の「パリの悲劇」に並び、日本代表にとっては、いわゆる「ドーハの悲劇」で有名でしょう。しかし、当時、開催国アメリカでは「フットボール」といえば日本でいう「アメリカンフットボール」のこと。いわゆる「サッカー」はマイナースポーツなのか、スポーツニュースでワールドカップ予選のニュースなどは、皆無でした。

ドーハの悲劇やパリの悲劇などは、アメリカ現地で朝に放映される日本語放送のニュースで知るくらいで、私にはあまり興味のない話題でした。

アメリカ本大会開幕が近くなても、開催地ニューヨーク、ニュージャージーでは全くといっていいほど、盛り上がりませんでした。

1988フランス大会、2002日韓大会のようなチケット騒動の話題もなく、ワールドカップ話題といえば、アメリカが本大会で勝つために、選手とその家族または一族にアメリカの市民権を与えて世界中から選手を集めただ、というような理不尽な話題くらいでした。

当時、私は、フォトグラファーと自ら名乗って、撮影の仕事は月に2、3本あればいい方で、普段は日本人向けのレンタルビデオ店店長をして生計をたてていました。

が、友人のコネで、東海岸で行われるスポーツイベントに試合の撮影をすることがありました。

当時は望遠レンズを持っていないので、撮影の度にレンタルショップから借りていました。ワールドカップの撮影などは、当時の私にとっては考えもしない事でした。

1994年6月18日午前中、突然、私の店に、報道関係の雑誌を出版している会社に勤める知人から電話がありました。

「今日の午後ジャイアンツスタジアムの撮影をお願いしたいけれど、空いてる?」

撮影の詳しい内容も聞かずに、私は仕事の依頼を受けました。

ニューヨークにはイタリア系、アイリッシュ系移民が多いので、6月18日のイタリア対アイルランド戦は盛り上がりを見せていました。そんな盛り上がりの一部を会場の外から撮影するつもりでジャイアンツスタジアムに行くと、知人の編集者が望

遠レンズを持って立っていました。彼はIDも持っていないのに、ワールドカップの撮影をさせようとするのです。彼はゲートでゲートの責任者を呼び出し、「私が本来撮影をする予定のIDを持っているカメラマンの代役だ」と話すと20分、何と私をゲート通過させたのです。

何回もチェックを受けるたびに、彼はその都度、係員などと話し、私を会場に導いたのです。

やっとの思いで会場に着くと、彼は私のアメリカの運転免許証と日本のパスポートを手に会場に入って行きました。再び待つこと30分、彼は私用のIDを持って来ました。彼が誰に何を話していたのか、私には分かりません。そして、IDを受け取った私は、会場の事務局、大会事務局などで、膨大な書類を書かされた後、撮影をすることが出来ました。

不可能を可能にした彼の口癖は、「ノックしないドアは開かない」でした。

過去にメジャー大会の撮影経験が、ゴルフのUSシニアオープンだけだった私は、ジャイアンツスタジアムのピッチに立った瞬間鳥肌が立つのを覚え、そして次の瞬間から、頭の中が真っ白になったようでした。

カラフルにまるで色分けされた用なスタジアムの観客席。その観客席からは体で感じられるほどの重低音の声援、大歓声で始まり、大歓声であつという間に終わったことしか覚えていません。

試合は優勝候補のイタリアがアイルランドに0-1で敗れる波乱がきました。

凄い試合の撮影をしていたのに、試合会場の雰囲気にのまれて、何も覚えていないなんて、今思い返せばもったいない話です。

現在ワールドカップサッカー本大会のIDを取得するのが、どんなに大変なことなのか、一説にはオリンピックIDを取るより狭き門だと聞きます。日本人フリーカメラマンでワールドカップのIDを取得出来る人は、いったい何人いるのでしょうか?

AJPSの先輩方が何年も前から苦労しているのを聞くと、私の体験は幸運を超えた、奇跡なのでしょう。

次の機会があれば、裏口ではなく、表玄関をノックして、ドアを開けて頂きたいと思います。



フランスvs.イタリア戦は、チケットを手にできずプレスセンターのテレビで観戦した

FRANCE'98 '98フランス大会

日本代表がアジア予選を突破して初めて本大会に駒を進めたのがフランス大会。くしくも、わたしが初めてワールドカップのADカードを手にしたのもフランス大会でした。毎日新聞出版部から仕事をいただき、「週刊サンデー毎日」や当時誕生して間もない毎日新聞のウェブサイトに記事を送りました。また世界文化社から出版された『ワールドカップフランス98全記録』にも寄稿しました。

この大会は、知人から紹介していただいたリヨンの寺田さんという方のお宅にホームステイ、フランスを東奔西走、まさに動き回りました。もう、これ以上頼まれてもTGV(フランス新幹線)には乗りたくない、それくらい動き回りました。もう、試合会場、プレスセンター、宿泊先以外は移動の連続という世界でした。

文・白髭隆幸
Text by Takayuki SHIRAHIGE
写真・清水和良
Photo by Kazuyoshi SHIMIZU

一般観戦客のチケット問題が、おおきくクローズアップされた大会でしたが、メディアチケットの争奪戦もたいへんでした。ADカードを持っていても、組織委員会にリクエストを出した試合が全試合見られるとは限りません。サンドニで行われた準々決勝フランスvs.イタリア戦は、チケットが回ってこなくて、プレススタンドから廊下一本挟んだサブプレスセンターでテレビ観戦したこともありました。そりや悔しかったですね。

しかし日本の3試合をはじめ、開幕戦から決勝戦まで、22試合を取材できたのは幸せでした。ADカードをくれたFIFAに対して「VIVA la FIFA!」と叫びたい気持ちも事実ですが、ADカードを持って取材する大変さを痛感した大会でもありました。



決勝戦、ロナウドの2ゴールでブラジルは5回目の世界一の座につく

2002 KOREA/ JAPAN '02韓日大会

日本と韓国共催の張本人ともいべき大韓蹴球協会の鄭夢準会長を2000年からたびたび取材、日経BP社から発行された「日本人に伝えたい!」という鄭会長の著書にかかわった関係で、前年の組み分け抽選会から本大会まで精力的に取材しました。開催国ということでADカードの割り当ても多く、無事2回連続でADカードを手にすることができました。

ただ、2001年の秋から2002年いっぱい、徳間書店から1か月に2回発行された「英雄神話」という隔週間誌の編集部に拘束されていた関係で、思いきって仕事ができないというハンデもありました。

開幕戦から4試合は韓国で取材し、日本の初戦に合わせて帰国。決勝まで日本サイドの試合を取材しました。再度、渡韓しなかったので準決勝第1試合、3位決定戦の2試合には立ち会えませんでしたが、その他日本でのマキシマムの19試合、計23試合を取材できました。

今回も札幌から大分まで全10会場、かなり長距離を動き回りましたが、日本の航空会社には「バースデイ割引」という制度があり、6月生まれのわたしは、大いにその恩恵にあづかりました。なにしろ、どこまで乗っても1万円ですから本当に助かりました。

日本代表は、埼玉で初勝ち点をあげ、横浜で初勝利(わたしの誕生日当日)、大阪で初の1次ラウンド1位抜け、なにからなにまでの初体験。そして雨の仙台でトルコに惜敗。自国での開催が夢のようでした。

一つ心残りがあるとすれば、ベスト4にまで進んだ韓国フィーバーを、この目で見ることが出来ないということでした。

史上初めてのサッカー大国同士、ブラジルvs.ドイツの対決で幕を閉じた2002年大会。夢のような1か月間でした。

文・白髭隆幸
Text by Takayuki SHIRAHIGE
写真・富越正秀
Photo by Masahide TOMIKOSHI



ブラジルと互角の試合を展開した日本代表
Photo by Masahide Tomikoshi

ワールドカップ ドイツ2006まで1年 2005コンフェデレーションズカップを取材して

文・岩崎龍一

各大陸連盟の優勝国などが集い、大陸間世界王者を決める。2005年コンフェデレーションズカップは、6月15日から29日までドイツの5都市で行われた。

この大会がFIFA管轄となってから日本代表が出場するのは3回目。95年に加茂監督指揮の下でインカーンチネンタルカップ(サウジアラビア開催)出場も含めれば4回目となるが、日本は過去にもこの大会で予想外の健闘を見せている。2002年日韓ワールドカップのプレ大会として開催された2001年大会は準優勝。フランスで行われた2年前の2003年大会では決勝トーナメント進出こそならなかったが、地元フランスとの試合では1-2で敗れたとはいえ、当時の欧州王者を相手に内容では圧倒するという戦いぶりを見せている。

今回のドイツ大会は1年後のワールドカップを前にしたプレ大会として位置づけられており、その意味で2年前のフランス大会よりも重要な大会だったといえるだろう。

出場8カ国が4チームずつ2グループに分かれリーグ戦を行い、各グループの上位2チームが決勝トーナメントに進出する大会方式。グループAに入ったのは開催国のドイツ、オーストラリア(2004年オセアニア・ネーションズカップ優勝)、アルゼンチン(2004年コパ・アメリカ準優勝)、チュニジア(2004年アフリカ・ネーションズカップ優勝)。グループBはブラジル(2002年ワールドカップ優勝、2004年コパ・アメリカ優勝)、ギリシャ(EURO2004優勝)、日本(2004年アジアカップ優勝)、メキシコ(2003年北中米カリブ海ゴールドカップ優勝)の組み合わせとなった。

6月16日、ハノーファーで日本は初戦

となるメキシコとの戦いに臨んだ。しかしながら、内容は1-2の結果以上にメキシコとの実力差を感じさせられるものとなつた。日本は開催国ドイツを除き世界で最も早く2006年ワールドカップ出場権を手にした国としてドイツに乗り込んでいた。しかし、その切符を手にしたのは6月8日のタイ・バンコクでの北朝鮮戦。チームはタイから日本に帰国して1日の休養を挟んだ後、再び日本を飛び立ってドイツに入ったのだが、バーレーン、タイの一連の遠征で蓄積された疲労はドイツに来ても完全に取れてはいなかった。

バーレーン戦と同様に3:6:1のフォーメーションでこの初戦に臨んだ日本。しかし、試合は開始直後からメキシコの華麗なパスワークと高度な個人技に翻弄されて、日本はボールさえ奪えない状況が続いた。そのような状況のなか、先制点を挙げたのは意外にも劣勢に立たれて

いた日本だった。12分、中盤深くから送った小笠原の縦パスに右サイドを攻め上がった加地がダイレクトのクロス。ゴール前に走り込んだ柳沢がDFに挟まれながらもブッシュリードを奪った。

しかし、この日の日本は中盤でのプレスも空回り。メキシコの速いパス回しでスペースを埋めることさえできなかつた。その中で多くのピンチを最後の一線で防いでいたが、それが破綻したのは39分だった。ペナルティーエリア外でフリーでボールを受けたジニャに鮮やかなミドルシュートを決められ1-1の同点。さらに64分にはファンセカにヘディングシュートを許し1-2の逆転を許した。

試合後、ジーコ監督は「普段なら起こり得ないようなポジションのミス、イージーなパスミスが起つた」と自ら招いた失点だったことを認めた上で、「もう少し休ませてあげられれば」と敗因の大きな要素としてコンディショニングの問題を挙げていた。

EUROのチャンピオンに勝った!

フランクフルトに舞台を移した第2戦。6月19日のギリシャ戦は、日本にとっては記念すべき試合となった。相手のギリシャは前年にボルトガルで開催されたEUROで奇跡の優勝を果たしたチーム。フロックとの評論もあったが、その堅固な守備と高さを生かした攻撃は、優勝するに相応しいレベルにあった。その意味で日本がこの欧州王者を相手にどのようなパフォーマンスを発揮できるかで、来年のワールドカップを占う判断材料となるからだ。

この一戦に勝たなければ決勝トーナメント進出への望みが断たれる日本はシステムを4:4:2に変更。攻撃的な布陣で試合に臨んだ。

開始から試合を優勢に進めたのは日本だった。ギリシャの激しいプレッシャーを速いパス回しでかわし、中盤を支配。19分には加地、22分は玉田が決定的なチャンスを迎えた。そしてその攻勢をゴールという結果に結びつけたのが66分に投入された大黒だった。76分に中村のスルーパスをDFラインの裏で受けると、DFのチェックをかい潜り右足で冷静なシュート。ボールはゴール左隅に突き刺さった。

試合後、ジーコ監督は「もう少し得点

があつてもよかった」と余裕のコメント。2004年の勢いこそなかったが欧州王者ギリシャを破ったという事実は、日本に大きな自信をもたらすことになった。

同じグループBの第2戦でブラジルがメキシコに0-1の敗戦。6月22日にケルンで行われた日本対ブラジルは両チームともに決勝トーナメント進出を懸ける一戦となつた。日本、ブラジルともにここまで1勝1敗の勝ち点3。ブラジルは日本を得失点差で上回っているために引き分けか勝ち、日本は勝てば4強進出が決まる。当初はブラジルはメンバーを落としてくるだろうという報道もあったが、負けられない試合だけに、ブラジルもロナウジーニョ、アドリアーノ、カカといった主力をそのまま先発させてきた。

立ち上がりにいきなりチャンスを迎えたのは日本だった。開始4分に小笠原のパスを受けた加地がゴール前に走り込み、コースを狙ったシュート。先制点かと思われたが、微妙な判定でオフサイド。幻のゴールに終わった。このプレーで目を覚ましたのか、その後ブラジルは完全に試合を支配。日本はボールにさえ触れない時間帯が続いた。その中ブラジルは10分にロナウジーニョのアシストで右サイドからロビーニョが決めて先制した。しかし、防戦一方だった日本も27分にペナルティーエリア前でフリーになった中村が豪快なミドルシュートを決め同点。だがブラジルは32分にまたしてもカウンターからロナウジーニョが決め、リードを奪った。

後半に入つてもブラジルの攻勢は続く。しかし、日本も粘り強い守備でしき、追加点を許さない。そして試合終盤には不安定なブラジル守備陣のスキを突き猛攻を掛け、88分には中村のFKが右ボストに当たったこぼれ球に大黒が素早く反応して土壇場で同点。さらに勝たなければ次の日本はロスタイムにも大黒がブラジルゴールを襲つたが、結局はこれを決め切れずに試合終了のホイッスルは鳴った。

しかしながら王者ブラジルを相手に終盤に攻めに出て圧倒したのは事実。ジーコ監督も「1点の重みをすごく感じた試合」と悔いを見せながらも「多くのチャンスを作り得点を重ね、いい展開だった」と、その内容には満足そうな表情を見せていた。

LAN回線使用料 1日59ユーロ(8260円)!

6月29日にフランクフルトで行われた決勝は、準決勝でドイツを3-2で下したブラジル、同じくメキシコを1-1の末PK戦で下したアルゼンチンの戦いとなった。当日は試合開始直後に豪雨になり、バルトシュタディオンのピッチを覆う屋根が壊れて滝のような雨がコーナー付近に流れ込むというハプニングはあった。しかし、試合は南米のライバル同士の一戦に相応しくハイレベルなものだった。

ともに世界的なスター選手を擁すチーム同士の戦い。この決勝戦を決めたのは、スター選手を上回るグレートな選手の存在だった。そして、そのグレートな選手たちをより多く擁していたのがブラジルだった。ブラジルは立ち上がりから自由奔放なサッカーでアルゼンチンを圧倒。10分にアドリアーノがキャノンシュートで先制すると、15分にカカ、46分にロナウジーニョ、67分に再びアドリアーノが決めて大量リード。アルゼンチンの反撃を65分のアイマールの1点に抑えて4-1の大勝を飾った。そして、そのサッカーは82年当時の「美しく、しかも強い」というブラジル本来の姿を取り戻したのではないかという錯覚さえ覚えさせる内容だった。

2006年ワールドカップの予行演習として行われた今回のコンフェデレーションズカップだが、運営内容はドイツ人の気質もあり非常に円滑に行われたといつていゝだろ。

98年のフランス・ワールドカップなどと比べてもチケット販売はIDの発行等、ほとんど問題は見当たらなかった。ただし、通信手段に関しては価格的に問題があった。プレセンサーに設置されているLAN回線は1日59ユーロ、また2週間強を通じて使用するLAN回線も600ユーロ(約8万4000円)と非常に高額だった。同じ時期にオランダで行われていたワールドユースでこれらの回線がすべて無料だったことを考えれば、納得のいくものではなかった。しかし、これはFIFAからの指示ということで、ワールドカップ本番でも同じ価格で設置されることとなるはずだ。これらのことを考えれば、来年のワールドカップに取材に行く際には通信手段を確保していくことが必要となるだろう。

■見えてきたカタール国内事情

日本からおよそ10時間のフライトを終え降り立ったドーハ国際空港。到着ロビーに早朝5時前、大あくびをしながらフライトの疲れを感じつつドーハの朝焼けを迎えるました。

2006年夏、日本各地で繰り広げられるバスケットボール世界選手権の出場権をかけたアジア予選が、9月8日から16日まで灼熱の中東カタール・ドーハで行われました。

2年前初めてこの地を訪れた時の印象は、あまり活気のない退屈な街の印象しかなかったのですが(たしか1月風の強



カタールサポーター。やはり白装束がたくさん来ました。ちなみに、入場料は無料だったようです

2006アジア競技大会を1年後に迎えるカタール・ドーハを取材して バスケットボール男子アジア選手権 リポート

文と写真・加藤誠夫

い毎日・曇り空・時々雨。長袖ヤッケが手放せない印象しかなかったのですが……)、今回訪れたのは、まさに灼熱の時期にかかりっていました。

空港より目的のホテルへ順調にタクシーで向かったが、到着後早速事件が勃発しました。タクシー運転手に受け取り拒否される! とは、何のことかといふタクシー料金です。

現地通貨はいくらか手持ちがあったので、日本円もUSドルも両替せず無防備にタクシー乗車。2年前の通貨は問題なく使えるだろう、と支払いの際手持ちの現地通貨を差し出すと、な・な・なんとNO! NO! とのこと? いったい、この

ドライバーは何を言っているのでしょうか。立派なカタールの紙幣ではないのか? と疑問に思つたない英語で尋ねてみると、答えはびっくり。この紙幣は、昨年に使えなくなったのだ、とあっさり言われ血の気がひけました(通貨・紙幣が使えないという前代未聞の現実にただ驚いたのです)。

新しい通貨の持ち合わせがない私はしぶしぶホテルマンに訳を話し、怪訝そうな顔をしながらお金を借りるという落ちが付きました(その日、早い時間に両替してシッカリと返済いたしました。会員の中で来年この地を訪れる方は、現地流通している通貨を確認してから渡航することをお勧めいたします)。

■建設ラッシュに、誰も試合会場を知らない?

機材準備をして取材場所に向かう際に、新たな問題を思い出しフロントマンに尋ねてみました。

「このスポーツクラブで試合があるのだけれど知っていますか?」と。

なぜ、こんな質問をするかというと、市内は軒並み建築ラッシュで地元の人ですら、いつどこに・何ができるか、全く知

らないことが多い(この件でその後事件がたびたびあった)のです。

全く取材場所が特定できない状況に、仕方なくメディアホテルの存在を思いました。4つ星のメディアホテルに行ったところ、簡単に疑問は解けました(当たり前ですね。メディアホテルなんだから)。朝一番の日本チームの後半戦に、なんとか間に合ったのです。

初日の取材も無事終え、顔見知りの台湾人記者と話をしていると新たな問題が発覚しました。ホテルに帰る足がないのです。

私の到着前からこの地に来ていた記者も、毎日違うスタッフの車に便乗させてもらっている状態でトランスポーテーションの問題は、結局最終日まで解決しなかった(プレス用バスはあるがスケジューリングできず、運転手が大変疲れているからあと1時間休ませてほしい、と泣きが入ることもしばしばあり)。プレスルームでは密かに「カタールタイム」と呼んでいました。

ドーハ市の交通手段に関してですが、日本人感覚で考えることはお勧めしません。市内電車・乗り合いバス等はありません、車社会のためタクシーが活躍します一般・リムジンとあり一般タクシーは確かに安い! しかし、なかなか流しタク



大会が行われたスポーツセンター前の道路です。舗装されたきれいな道路ですが、たまに車の往来があるだけで、流しのタクシーなんてありません



どこの国でも女性にはやさしい。プレスルームでレバノン女性記者の誕生日を祝ってバースデーケーキが贈られた。ちなみに、私はご相伴にあづかれなかった



閉会式。期間中いろいろなこと(流血・乱闘など)があつたけど、無事終了することができました

す。最後には「荷物を預けなければチェックイン許可しない」とすっかりお手上げ状態。頭痛の度合いは増す悪循環。

しぶしぶ、全ての荷物を預け機上の人となりました。

機内で日本人アテンダントに支社への要望書なるものをいただき(B5サイズ折りたたみレターヘッド)事実をありのまま書き連ねて渡した次第です。

機内空席状況をみて驚きを隠せない状態だったのは言うまでもありませんでした。

常エンドライン左・右側にフォトボジョンが設けられるのだが)。メディア責任者によると、「TV放映関係上、カメラマン(VTR・スチール両方とも)映りこんでしまうのは契約上困る。バックスタンド側に行かないで。メイン側でしか撮影は許可しない」と、強引とも思える話に中国人記者たちからは大ブーニング、その代わりスタンドからの撮影はOKと。しかし、アリーナ内には観客と等しい程の警官がいてスタンドのこんなところで、と過剰警備ぶりには嘆然とした。

その点、若干値段は高いがリムジンタクシーはお勧めできます。

車が比較的新しい、クーラーが付いている等、最初に値段交渉はありますが確実に目的地を往復するには最良の選択ではないでしょうか。ちなみにドライバーの中には、プロの方とその友達(サラリーマン風)のアルバイトもいます。

不慣れな場所でのアクセス確保には苦労がつきものです(もちろんアジア競技大会の際には、円滑な運営を期待したい)。

■プレス対応は、多くを望めず

大会期間中のプレス対応に関してですが(今大会に限っての話になります)、プレスルームにはデスクトップPCが10台ほど並んで、通信状況はまだ発展途上の段階です(ネットは100MBといちおう出でいたようです)。

期間中システムダウンすることもあり、初めの頃はかなりでんやわんやでしたが徐々に対応し、記録関連の作業は比較的早く各ゲーム終了後10~15分には出来上がっている状態で記者会見終了後には各国記者がこぞって記録を参照、自國に記事を配信していました。

フォトボジョンに関しても問題がありました。

オリンピックに始まり世界選手権と冠が付く大会(NBAは取材実績により撮影場所が決まっている)等での撮影場所が今大会に限ってはNGをだされました(通

そして帰国当日、取材を終えた安堵感と疲労から軽い風邪気味な身体で空港へ向かい、日本人記者2人とともに国営航空Q社チェックインカウンターへ着いた。先に搭乗手続きを済ませた記者2人は免税店での買い物を楽しみにして待っていたのですが、私の手続き難航は言うまでもありませんでした。

スーツケースは難なく預ける手続きをとりましたが、あろうことか「リュックサックも預けなさい」とのカウンター担当者。訊を尋ねると、「サイズが大きい」と中身を見せて取材でこの地を訪れたこと(身分証明書も提示し)を説明したが聞き入れられませんでした。

次に機材をスーツケースの中に入れて預けろ、という担当者の話にも、中身を開けて機材の入るスペースがないことを確認、こう着状態で時間を費やす中、

「日本語を理解するスタッフを呼んでほしい」とリクエストを出したものの、来るのは同社の異なる制服を着た係員、同じ話を繰り返す状況に事態は悪くなるばかりで

アジア予選の結果、本大会出場国はヤオ・ミン率いる中国、並いる強豪を抑えた中東のレバノン、開催国カタール。以上3か国が世界選手権の出場を決めました。

韓国は最強と呼ばれる選手を選抜して(NBAで活躍のハ・スンジンなど)臨みましたが、予選からの怪我人を抱えたままの戦いを強いられ、残念ながら世界選手権の出場権を逃してしまいました。

2006年夏、バスケットボール世界選手権が日本各地で繰り広げられます。日本チームは、ホスト国として本戦出場権を得ていますが(今回のアジア予選は5位)、

国際大会経験者数の少なさや、選手一人ひとりのスキルアップなど、課題は山積み状態になっている現実。日本代表パブリセビッチ・ヘッドコーチの手腕が真に問われることになるでしょう。

成長過程で、つまずいて泣いたりすることは良くあること。それでも立ち上がり歩みを止めない、来夏には立派に成長した日本男子バスケットボールチームを取材できることを楽しみにしましょう。



加藤誠夫

Yoshiro KATO
1965年2月7日、東京都生まれ。東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)報道写真科85年卒。中学生の時にテニス専門誌の写真を見てショックを受け、スポーツフォトグラファーになると志す。現在、サッカー・バスケットボール・バレーボールを中心で撮影。最近は、タレントや映画監督などスポーツ以外の幅広いジャンルで活動している。もちろんテニスの撮影も継続中。

2005
New face
of
AJPS
01



荒川祐史

1973年4月23日生まれ。
1996年に大山謙一郎に師事。
2001年からフリーとして活動し、
現在は、格闘技、サッカー、ラグビー、
高校野球などを被写体にしています。

AJPS
NEWS
3

14

DECEMBER 1
2005



浜口京子



ライカ

AJPS
NEWS
23

15

DECEMBER 1
2005

2005
New face
of
AJPS 02



尾張正博

93年にフリーランスとなってからは、精力的に海外取材を開始。1998年から4年間、F1誌GPXの編集長を務めた後、2002年からグランプリを全観カバー。GPDiary (www.f1.panasonic.com/ja/diary/index.html) では写真を組み合わせた新たな活動も試みている。

AJPS
NEWS
23

16

DECEMBER 1
2005

●忘れてはならないもの

史上最多の19戦でシリーズが争われたF1世界選手権も、10月16日の中国GPで最終戦を終え、短いシーズンオフに入った。いまはシーズン終盤に取材したレース関係者の声を集めて、2005年を振り返る原稿を執筆している。テーマは「今年のベストレース＆ワーストレース」。取材した音声データを聞き返し、取材メモをひっくり返すと、ほとんどのレース関係者が今年のワーストレースとして、あるグランプリの名前をあげているという事実にたどり着いた。それは、6月19日にインディアナポリスで開催されたアメリカGPである。

事件のはじまりはグランプリ初日となった6月17に行われた練習走行での、ラルフ・シューマッハ（トヨタ）のタイヤトラブルだった。最終コーナーのコンクリートウォールにクラッシュしたR・シューマッハのマシンは大破。その後、R・シューマッハはドクターストップがかかり、2日目以降を欠場した。じつはこのクラッシュとほぼ同時にトヨタはテストドライバーのリカルド・ゾンタのタイヤにもトラブルが発生。事態を



重く見たチームは、その日は残りのセッションを自粛。原因究明を急いだ。

その後、大きなトラブルにはつながらなかったものの、トヨタ以外のチームにもタイヤトラブルが発生していることが判明したため、急遽これらのチームにタイヤを供給している某タイヤメーカーは、本社のあるフランスから新しいタイヤを空輸するとともに、安全が確認されるまで、練習走行でもっとも高速となり、タイヤに負担がかかると思われる最終コーナーでの走行を自粛するよう指示を出すのである。そのため、練習走行でほとんどのマシンはグランドスタンド前のストレートを全速力で駆け抜けることはなく、ピットインした後、ピットロードを時速60km/hで走行して再びピットアウトするという奇妙なドライビングを繰り返



した。

しかし事態はその後、解決へ向かうどころか、最悪のシナリオへと向かうのである。結局、空輸される予定のタイヤでも安全性が確認されないことが判明したタイヤメーカーは、レースに向けて高速の最終コーナーにシケインを設けることをFIA（国際自動車連盟）に要求。しかし、FIAはコースの改修には応じないと、この要求をねね返したのである。問題が発生しているタイヤメーカーからタイヤの供給を受けている7チームと、ライバルメーカーから供給を受けている2チームの合計9チームの代表は、「FIAが認めないな

ら、主催者であるインディアナポリス側の了解を取ってコースを改修し、ノンタイトル戦としてレースを実施する」という方向で意見をまとめた。しかし、これにフェラーリが反発。結局、話し合いは物別れに終わる。タイヤに不安を抱えた7チーム14台のマシンがフォーメーションラップ後にピットインし、スタートラインにつかずにリタイア。タイヤにトラブルを抱えていない6台のマシンだけでスタートが切られるという前代未聞のレースが展開されたのである。

レースをスタートすることなく、リタイアを選んだあるチーム関係者は、6台のマシンがサーキットを走る中、ピットガレージの裏



で記者会見を開き、自らの主張が正しかったと語気を高めた。現代のF1は大企業が参入している。マイナスイメージは避けたいという彼らの気持ちは理解できる。さらにもしその事故が原因で観客に被害を与えてしまった場合、危険を承知でレースに参加して事故を引き起こしたということで、訴訟社会のアメリカでの損害はかなり大きなものとなるだろう。リスクマネジメントという企業側の論理としては、リタイアは考えられる最良の選択だったかもしれない。

しかし、F1はスポーツである。それを支えているのはファンであり、ファンを無視したプロスポーツは成り立たない。あの日、レースはなんのアナウンスもなく、予定通り午後1時にスタートが切られ、ブーンが鳴り響く中、73周後にチェックフラッグが降られて終了した。14台のマシンがリタイアした理由もアナウンスされなければ、レース後におわびの会見も、当日応援に詰めかけてくれた約20万人のファンへのサービスもなかった。それだけでなく、リタイアしたチームの多くのスタッフは、レース中にサーキットをあとにしたのである。彼らは「ファンの皆様のために、最後までレースをスタートさせたかった」と無念のリタイアだったことを強調していたが、レース後にとった行動は本当にファンのことを考えていたのかと首をかしげたぐるものだった。

あるレース関係者は当時を振り返って、なぜ20台そろってレースがスタートできなかつたかを考えるときが、いまもあるという。「おそらく、アメリカのチームが中心になって行っているCARTやIRLだったら、なんとかしてみんなでレースをしたと思う。しかし、さまざまな国籍の企業が集まっているF1は、それぞれのエゴが強すぎたし、不正直な者もいた。あれは恥すべきレース」と斬った。ファンに斬られる前に、F1界全体で自浄してもらいたい。そして、私たちジャーナリストには、あのレースを風化させてはならない義務がある。

注)なお、トラブルを引き起こした某タイヤメーカーは、後日チケットの払い戻しに応じるなど、前例がない救済措置を開始した。

AJPS
NEWS
23

17

DECEMBER 1
2005

2005
New face
of
AJPS
03



北村大樹

1976年東京都生まれ。
日本写真芸術専門学校にて報道写真を学ぶ。
2001年3月卒業。卒業とともにアフロスポーツ所属。
ジャンルを問わず、さまざまなスポーツシーンを追
いかけ、選手が見せる一瞬の表情を活かした写真を通じて、スポーツの感動を表現しながら日々活動中。



ドラゴン・ストイコビッチ
2001/07/21 ピクシー引
退試合
東京ヴェルディ1969vs
名古屋グランパスエイト
／東京スタジアム(現味
の素スタジアム)



北島康介
2004/08/15 アテネオリ
ンピック
男子100m平泳ぎ決勝
/ Olympic Aquatic
Centre Pool



井上康生
2003/04/29 全日本柔
道選手権大会
決勝戦 vs 鈴木桂治
/ 日本武道館

2005
New face
of
AJPS
04



小城崇史

1962年10月1日東京都生まれ。
1996年フォーミュラ・ニッポンを皮切りにスポーツ取材を開始。近年は、1997年より手がけているMLB取材に没頭。新聞社系週刊誌ほか雑誌媒体等にて活躍中。日本写真家協会・日本写真学会会員。

AJPS
NEWS
23

20

DECEMBER 1
2005

松井秀喜



ペドロ・マルチネス

AJPS
NEWS
23

21

DECEMBER 1
2005

2005
New face
of
AJPS 05



坂本 清

1968年東京都生まれ。
1986年より1999年までアマチュアスポーツを中心に取材活動。1999年よりフリーとして活動開始。主にバレーボール専門誌を中心に撮影。

AJPS
NEWS
23

22

DECEMBER 1
2005



1



2



3



1



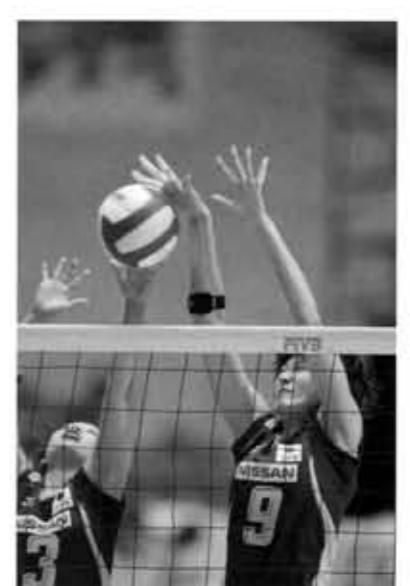
4



5



6



7

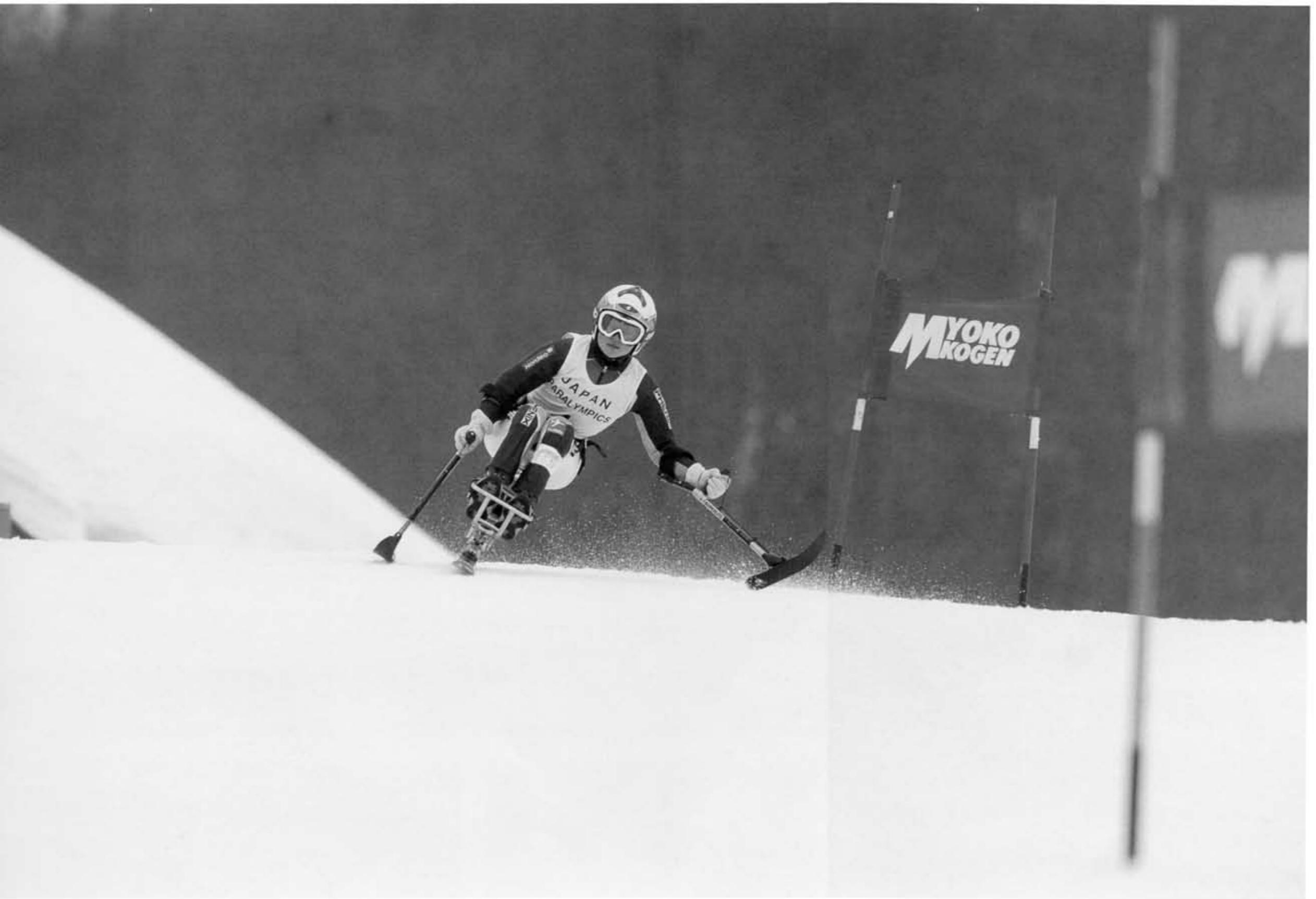
第13回アジア女子選手権大会
中国(太倉<タイカン>)
1 木村沙織 カザフスタン戦 負け
2 木村沙織 レシーブ
3 吉澤智恵 ブロック
4 吉澤智恵 スパイク

ワールドグランプリ(決勝) 仙台市
5 大友愛 スパイク
6 大友愛 スパイク
7 杉山 竹下 ブロック

AJPS
NEWS
23

23

DECEMBER 1
2005



2005
New face
of
AJPS 06



清水一ニ

写真家。フォトサービス・ワン代表。
国際パラリンピック委員会(IPC)メディアカメラマン
1954年横浜市生まれ。横浜市旭区在住。
日本大学芸術学部写真学科卒業後、神奈川リハビ
リテーションセンター写真室に非常勤で勤務。そこで
障害者のスポーツと出会う。車椅子での富士山登
頂に同行撮影し、読売新聞社写真コンクールに入
選。その後プロラボ(現像所)での技術・営業を経
て、1980年フリーカメラマンとなる。各企業の広報誌
や教宣誌、カタログなどの企画・撮影に携わるかたわ
ら、ライフワークとして障害者スポーツを撮り続けてい
る。20年にわたる障害者のスポーツの記録活動を
通じ、国内外の選手や団体との親交も厚い。長野
冬季パラリンピックおよびシドニーパラリンピックでは、日本人唯一の国際パラリンピック委員会メディア
カメラマンとして撮影を行うとともに、NHK総合テレビ
においてコメンテーターを務めるなど、活躍は多岐に
わたっている。

「私は、世界中ですばらしいパラリンピッ
クアスリートと出会ってきた」

身体に障害を持ちながらも厳しい競技の
世界に身をおくことによって自らを鍛え、
常に「一步上」への挑戦を継続している
アスリート達がいる。

私が、パラリンピック・アスリート達から受け
取った感動と生きる勇気を、私の写真を
とおして、世界中の人们に伝えることが
できれば、この上ない幸せである。

2005
New face
of
AJPS
07



戸村功臣

1973年東京都生まれ。
15歳でアメリカ(LAKE TAHOE, CALIFORNIA)に渡りスキー・スノーボードを学ぶ。その後、SIERRA NEVADA COLLEGE(FINE ART, PHOTOGRAPHY)において写真映像を学ぶ。
日本、アメリカの出版社の依頼を受けて、フリーランス活動を開始。2000年よりアプロスポーツに籍を置き、雑誌・スポーツメーカーなどの撮影を中心に新たな映像表現に取り組む。

AJPS
NEWS
23

26

DECEMBER 1
2005



AJPS
NEWS
23

27

DECEMBER 1
2005

Super Powers Cup
05/05/25
カナダ代表 30-26
アメリカ代表
国立競技場



AJPS
NEWS
23

28

DECEMBER 1
2005

2005
New face
of
AJPS 08



富中良晴

1976年7月、新潟県小千谷市生まれ。
武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒。現在は
フリーランスとして活動中。2005年2月より、JRA「優
駿」においてUNBRIDLED'S SONGを連載。

AJPS
NEWS
23

29

DECEMBER 1
2005



1



2

- 1 2004年7月 日本×イタリア、秩父宮ラグビー場
- 2 2004年11月 東京競馬場
- 3 2004年3月 JBLファイナル アイシン×東芝、代々木第2体育館



マカオ・スタジアムのプレスセンター
Photo by Kyutaro Makino

第4回東アジア競技大会取材報告

Report of The Macau 2005, 4th East Asian Games



2005年10月29日から11月6日まで中華人民共和国マカオ特別行政区で開催された第4回東アジア競技大会。今回もAJPSは日本オリンピック委員会のプロトコルの下、取材のためのADカードを取得することができました。関係者諸氏に感謝いたします。

今後もスポーツ報道を通じ、スポーツの発展、進歩の一助となるべく活動し、スポーツ団体と良い関係が築ければと願っております。

本協会会員でADカード取得者は、フォトグラファー5名（うち2名は所属会社から取得）、ライター1名で、ほぼ全期間、大会をカバーしました。以下は簡単ながら大会の取材リポートです。

今回の東アジア競技大会は、九つの国と地域（中国、中国香港、日本、韓国、朝鮮民主主義人民共和国、モンゴル、中華台北、グアム、中国マカオ）が参加しました。4年前の第3回大阪大会には、カザフスタンとオーストラリアが参加していましたが、今回は欠場しました。

実施競技は、陸上競技、水泳、バスケットボール、ボウリング、ダンススポーツ、ドラゴンボート、サッカー、体操、ホッケー、空手道、射撃、ソフトテニス、テコンドー、テニス、重量挙げ、武術の17競技234種目でした。

競技会場は、マカオの半島部、タイパ島のマカオ・オリンピック・コンプレックス、コタイ島のコタイ・スポーツ・コンプレックス

の3カ所に分散しており、それぞれにプレスセンターが設置されていました。

近年のマカオの発展ぶりは目覚しく、日本で手に入る旅行ガイドブックや観光地図では、海になっているところが埋め立てられ、そこに立派なスポーツ施設が作られているといった塩梅（あんぱい）で、現地に行って初めて概要が分かるような感じでした。

今大会は「選手村」が作られず、選手が主要ホテルに分宿していました。たまたま私が日本で予約したホテルにも日本のテニス、ソフトテニス、サッカーの選手が宿泊しており、トランスポーターには、問題がありませんでした。もともとマカオは狭い場所で、タクシー代も安いので、

まったく移動には不自由しませんでした。

特筆すべきは、ジャーナリストのADカードホルダーには、関係者食堂で無料で食事が提供されたことでした。ADカードにナイフとフォークが付いており、プレスセンター近くにある3カ所の関係食堂で昼食と夕食が食べられました。さすが「食は広州にあり」などといいます。マカオのお隣は広州ですから。5年後のアジア競技大会でも、このようなサービスが受けられるといいですね。

毎回問題になる原稿を送る通信システムですが、今回はプレスセンターに無料LANが通じており、なんの問題もありませんでした。有線だけでなく無線LANも開通。備え付けのデスクトップのパソコンの一部には、日本語のソフトも入っておりノートパソコンが故障しても原稿を日本に送ることができました。

大会自体は、マカオ初の総合体育大会ということで、運営面に不安があったのですが、バックに中国がついているだけに完璧でした。「一つの中国、二つの制度」の恩恵を大いに享受できたわけです。来るべく北京オリンピックの予行練習という意味もあったでしょう。開会式では本物の鶴まで登場、見事なものでした。

競技自体は強すぎる中国ばかり目立ちました。次回からはメダル獲得数の上位NOCには年齢制限をつけた方が良いのではと感じました。中、日、韓は20歳以下で、その他のNOCは年齢制限なし、そのくらいのハンディをつけたほうが良いと感じました。

今回の日本チームは、必ずしもトップレベルの選手が参加したわけではありませんが、目標にしていた成績は下回ったようです。私の印象では健闘したのが陸上競技、ホッケー、空手道、ソフトテニス女子。まずはサッカー、バスケットボール男子。期待はずれだったのが水泳、体操、バスケットボール女子といったところでしょうか。

以上の通り、10日間にわたる大会を楽しく取材することができました。トラブルは、ADカードを紛失した会員が1名いたこと。再発行の際、責任者（水谷会長）

のサインを貰ってこいと言われ、一時は現地に取材にきているご子息の豊氏に代筆してもらうという冗談も出たほど。しかし無事に翌日再発行されました。

飛行機便の都合で、私は帰路香港に一泊したのですが、高温多湿と交通渋滞は相変わらず。4年後の東アジア競技大会は香港で開催されるので思いやられます。

また、加藤誠夫会員がカタールのリポートで書いていますが、飛行機に預ける荷物のオーバーチャージは、かなり五月蠅くなっています。海外取材の際はくれぐれもお気をつけください。

（文・白鷗隆幸）



白鷗隆幸

こここのところ1年に1回発行ということで、あっという間に1年が過ぎてしまうという感じです。

2002年のソルトレーク冬季オリンピック、そしてサッカーの韓日ワールドカップから早いもので4年経とうとしています。

トリノ冬季オリンピックまでは2か月、期待を込めて表紙は安藤美姫選手。そしてドイツワールドカップまで7か月、ということで過去のワールドカップを回顧してみました。

AJPSも会員数が140名近くにまで多くなり、なかなか会員の方をすべて知ることは難しくなってきました。そこで今年度新入会員の方にご協力願い、報道写真集ということで紹介かたがた特集を組んでみました。

いたるところでテロによる爆破騒ぎがあり、インフルエンザが流行するようなニュースが盛んに流されています。来るべく2006年が平和で、せめてスポーツが世界中のすみずみで無事に行われるよう祈るばかりです。

分科会のお知らせ

AJPSでは、円滑な取材活動を行うため、競技ごとに分科会を設けて各競技団体広報担当者の方と連絡を取り合っております。現在、正式に理事会で活動を認めているのは下記の分科会です。競技の取材等、お問い合わせは直接担当者までお願いします。

■陸上競技

高橋学、三船貴光、篠田純

■サッカー

松本正、今井恭司

■柔道

芳賀伸哉、中野英聰

■体操

竹内里摩子

■バレー

牧野龍太郎、坂本清、宮崎恵理

■バスケットボール

加藤誠夫

■ラグビー

井田新輔

AJPS 日本スポーツ プレス協会会報 23

DECEMBER 1 2005

編集・発行人 水谷 章人

編集スタッフ 白鷗隆幸、石川聰、吉田かおり

編集協力 光本 淳（色えんびつ）

編集・発行所 日本スポーツプレス協会
(AJPS)

〒112-0013

東京都文京区音羽1-21-10

開根ビル602

TEL. 03-3946-9033

FAX. 03-3946-9033

Web <http://www.ajps.jp>

E-mail info@ajps.jp

本誌掲載記事、写真を無断で転載することはできません。



Canon

CREATE

PRO LAB FOR CREATIVE PROFESSIONALS

 **FUJIFILM**



Kodak

 **KONICA MINOLTA**

**SHASHIN
kosha**

Nikon

OLYMPUS®

PENTAX



TOKYO
VISUAL
ARTS